



1988年(昭和63年)
3月号(No. 513)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club
定価一部 150 円

目次

- 三国友好登山の準備を終えて
大塚博美……(1)
- 海外の山「頂上の静寂」……(2)
- 北八甲田山ロープウェイ建設
計画をめぐる 八木健三……(3)
- 自然保護随想……(4)
- 第25回「この一本展」展示図書
について(Ⅱ) 望月達夫……(5)
- 創立30周年記念集会
熊本支部……(5)
- この道、山と本と JAC と…
孫 慶錫……(7)
- 会員通信……(7)
- 三国合同登山隊事務局だより……(8)
- 三国登山会員募金応募者ご芳名……(9)
- 図書紹介……(10)
- 「大分の山」「栃木の沢」
高郷山荘へどうぞ……(11)
- 報告……(11)
- 追悼 山崎金次郎さんを悼む……(12)
- 訃報 清田 清氏……(13)
- 会務報告・ルーム日誌等……(13)
- 新入会員・住所変更……(14)
- お知らせ……(15)

▶日本山岳会事務取扱時間
月、火、木、土曜 10時～20時
水、金曜 13時～20時
日曜・祭日は休み
▶図書室開室時間
日曜・祭日・月曜を除く毎日
13時～20時

お知らせテロップ電話

234 六六五九

三国友好登山の準備を終えて

実行委員長 大塚 博 美

八八年一月下旬、カトマンズに三国の総隊長が集り、総指揮部会を開いて、準備の総括と具体的登山活動について打合せを行いました。

そこでは昨年二月下旬、北京において調印されました三国友好登山の議定書に定められた、各国の責任分担事項について各々報告が行なわれ、最終的な確認がなされました。

そこで、三国が分担した責任事項の概要について報告いたします。

チョモランマ・中国領土、サガルマタ・ネパール領土の各々のルートを提供する中国とネパールはホスト国として、登山活動に関するそれぞれの領土

内における宿泊、輸送、食料など、ベイスキャンプの設置を含めての便宜供与の万全を期すべく準備しております。

日本は、北・南両サイドのベイスキャンプ以上の装備・食糧・酸素・燃料・医療などの三分の二の物資の調達、ならびに登山の基本的なタクティクスと、両国の準備に対する経済援助などでありました。

日本に係わる責任分担事項が重大であることは一目瞭然でありましたが、共催者のご支援と今までに培ったヒマラヤ高所登山のノウハウと、経験者を中心とした隊員の尽力によって無事予

定通り責任を果たすことが出来、その隊荷の一部はカトマンズ、北京に到着いたしました。

準備完了のご報告を、喜びを込めて、会員の皆様に行なえることを幸せに存じております。

議定書には、この友好登山のビジョンが打出されておりましたが、準備を通じ、それが肉付けされ、ポリシーが策定されて行きました。

初の三国平等友好登山、初の国境を越えての交差縦走、初の世界最高峰からの衛星TV生中継。これらは三国友好登山の目的として、当初より大きく掲げられて来ました。山頂における衛星TV生中継が、交差縦走の登山活動と併列し、目的の両輪として明記され、タクティクスの中に組込まれたことは、ヒマラヤ登山史上初のことであり、将来に向け多くの示唆を含むこ

に積極的に協力し、国境をオープンし、山頂のTV中継にも取組んだということは、ヒマラヤ登山史上、初の交差縦走という記録以外の、歴史的な側面にも深い意義を感じさせるものがあります。

そして、この計画に日本が深くかかわって来た必然性も、極く当り前のことのように思えてなりません。

では以下、隊の編成、物資、経費予算の概要をご報告させていただきます。

一、隊の編成(会報・昨年十一月、509号参照)

日本隊総員一〇四名(登山・五一名、TV・四〇名、新聞・一三名)。このうち登山隊五一名については、会報にて、一部を除き三九名発表いたしましたので、残る隊員についてお知らせいたします。

登山隊員につきましては、昨年四

月面接以降、候補隊員のうち、登山事故、病氣、仕事の都合など数々のハプニングがありましたが、この登山に見合ったベストメンバーを揃え、ここに最終の編成を終了いたしました。

▽総顧問・桜内義雄スポーツ議員連盟会長、後援総顧問・小林与三次読売新聞社々長、NTV会長。

▽登山隊本部Ⅱ名誉総隊長・橋本龍太郎(50)、総隊長・今西寿雄(73)、副総隊長・大塚博美(63)、本部秘書長・神崎忠男(47)、留守本部長・鈴木郭之(56)。

〔北側〕記録・小池英雄(28)。▽装備・高橋省吾(24)。▽医療・平田和男(34) 京大医、増山茂(39) 千葉大医。▽気象・宮田賢二(48) 広島女子大、神園泰比古(37)。▽通訳・長谷川清一(32)。

〔南側〕輸送・加藤智二(27)。▽医療・鈴木尚(44) 金沢医大、忽滑谷和孝(26) 慈恵医大。

なお、TV・報道隊のうち会員は次の通りであります。

▽TV隊Ⅱ隊長・岩下莞爾(52)、頂上撮影・中村進(41)、頂上撮影・中村省爾(45)、報道記者・智片健二(29)、頂上撮影・大西宏(25)。

▽新聞報道隊Ⅱ隊長・岡島成行(44) 記者、迫田泰敏(43) 記者、写真・鉢坂青(55)。

海外の山

頂上の静寂

二年二カ月ぶりの登頂。さて、どの山かわかりますか？ ネパール側からのエヴェレストのことだろう、と即座に言える人はよほど日頃から熱心に山登りの記録を追っているヒマ人に違いない。

以前このコラムでも書いたことだが、一九八五年十月三十日、日本の植村直巳物語撮影隊の七人が南東稜から登頂して世界最高峰登頂者の数をついに二百人台とした。その後もいくつもの隊が挑戦しているが、ネパール側からは以来頂上に立った人間は実はいなかった。昨年十二月二十二日、韓国のホ・ヨンホ(許永浩)がシェルパのアン・リタと共に東南稜から冬季第四登を成功させ、最近になく長く続いていた頂上の静寂を破った。もともと、北面の中国側からは八六年八月三十日、スイスのロレタン、トロワイエのペアが北壁日本山岳会ルートを行復四十四時間という驚異的なスピードで登っており、純粹に頂上に人が立たなかった時間は一年三カ月ということになる。

文字通り四季を通じて各国隊がさまざまなルートとスタイルで挑戦し続けているエヴェレストである。毎年二つや三つの隊は必ず登っているように思いがちだが、そうでもなかった。一年以上登られなかったのは、七三年十月、日本の第二次RCC隊の石黒久、加藤保男が登った後、七五年五月、日本女子隊の田部井淳子、アン・ツエリンが登るまでのブランク以来のことだ。ネパールの登山家、アン・リタの活躍がこの中で印象づけられる。

アン・リタの最初のエヴェレスト登頂は、八三年五月、アメリカ隊のシェルパとしてだった。四人のアメリカ人と頂上に立った当時三十五歳の元氣者は、一次隊で無酸素登頂しただけでなく、十日後の第三次アタックにもウエルズ、バスの二人のリッチな五十男とてっぺんをめざし、八五四〇mで断念している。

翌八四年十月には、チエコスロヴァキア隊に同行、南稜からやはり無酸素で頂上に立った。この時の登頂者の一人、プソトカは五十歳で、七九年のG・シュマツツ(西独)の最高令登頂記録を塗りかえたが、下山中クレヴァスに落ちて死亡した。

三回目はエヴェレスト登山史上最多の十七人の登頂者を出した八五年春のノルウェー隊である。この時もアン・リタは当然の如く酸素を使わず、しかも終始トップに立って二次隊メンバーとして登頂を果たした。同じ日に登った仲間のスンダレは、何と四度目のエヴェレスト登頂であり、再度頂きをねらった五十五歳の米実業家、デイク・パスの執念の登頂と共に時代を感じさせる登山だった。

そして、今回の冬季無酸素登頂である。自分の肺と心臓でエヴェレストに四度も登ってしまう人間が現れたことを私達は軽く考え過ぎてはいけない。シェルパだから、仕事でやってくるんだから、という、今もししばしば耳にする荒っぽい言い方でこうした行為をくくることは、発想の貧しさを露呈するだけだろう。

エヴェレストだけでなく、世界第二の高峰、K2も多くの挑戦はあるが、この一年余り登られていない。気象の悪さなど種々の原因があるだろうが、山々が沈黙の時を持つのも悪くはない気がする。

(江本嘉伸)

海外の山

1987年12月31日現在の収支報告

収 入		支 出	
読売新聞社	¥70,055,000	12月31日までの	
日本テレビ	¥170,066,280	準備経費	¥175,763,445
利息	¥1,219,951		
その他	¥9,637,800	現金	¥75,215,586
計	¥250,979,031	計	¥250,979,031

※準備経費内訳

1) 日本山岳会担当準備経費	¥54,137,522-
2) 中国・ネパール援助費	¥78,570,709-
3) 日本国内事務費	¥29,851,884-
4) 対外交渉費	¥13,203,330-
合 計	¥175,763,445-

※現在現金

手持ち現金	¥1,344,062
協和銀行	¥73,871,524
計	¥75,215,586

二、物資(登山隊の荷物)
酸素、高所登山靴はフランスから直送。AMPポンペを北京へ二〇〇本、カトマンズへ一四八本各々直送済み。他の殆んどは隊荷は船便にて、中国向けは天津から北京へ、ネパール向けはカルカッタから陸送でカトマンズへ、他の一方はシンガポール経由で空路カトマンズへ、各々昨年十二月から今年一月にかけて船出し済みで、共に無事各々の地点に到着しております。
日本側の物資の総量は約六九ト(登山・四〇、TV・二八、新聞・一)になりました。
三、経費・予算
(支払い予定について)

八七年十二月三十一日現在の収支の明細は別表の通りでございます。
▽収入合計、二億五千九十七万九千三百十一円
▽支出合計、一億七千五百七十六万三千四百四十五円
▽残高現金、七千五百二十一万五千五百八十六円
▽未払い分支払い予定額、七千二百万円
▽登山隊予備金、約四千万円
これは、募金にて充當いたします。
▽募金状況は(一月十八日現在)二千九百七十万円。
会員および企業募金の入金済み、ならびに申込済みの合計であります。

なお、現在も募金活動中です。
経費の点について特記事項として申し添えさせて頂きますが、担当各係の努力によって、物品寄贈と、物と人の輸送サービスなど、金額に換算して約七千万円の寄付と援助を頂きました。今回の三國友好登山が前述いたしましたように、国レベルの登山事業となり、「初」のつく国境越えの交差縦走、衛星TV生中継、電送原稿送りなど、プランの重厚味、それにつれて人員の自然増など、見切れぬ部分が多く、物

北八甲田山ロープウェイ建設

計画をめぐって

八木健三

最近十和田国立公園の北八甲田山に、大規模なロープウェイ計画が浮上し、大規模な自然破壊が憂慮されている。
この問題を科学的に解明するため、弘前大学の研究者を中心に組織された「美しい八甲田環境アセスメント調査団」から、同じような問題をかかえている北海道自然保護協会にも協力を求められたので、私は十月上旬現地調査に参加し、また十一月下旬の同調査団の中間報告会で報告をうかがうとともに、私の見解も発表させていただいた。

た。ここにその概要を記したい。
私は既設の八甲田ロープウェイで田茂岳に登り、赤倉岳、井戸岳を経て大岳にいたるコースを調査したが、とくに井戸岳南斜面の登山道の崩落、土石流、大岳頂上周囲の裸地のひろがりには一驚を禁じ得なかった。牧田肇教授はこのロープウェイが昭和四十二年に建設されて以後の、井戸岳と大岳の裸地の変遷を航空写真をもつて追跡した結果、それらの裸地の面積が、年々拡大しつつあることがはっきりと示され、さらにハイマツ帯や高山植物帯が

資増加は当初の予想を可成りオーバーする見通しが見えて来ましたので、装備、食糧など積極的に物品寄贈依頼を各方面にお願いいたしました。
大きな成果を挙げることが出来たことは、係りの努力に負うところが大きいです。JACの信用と、各位のご支援と温かいご理解によるものであることは言を待ちません。この登山によせる各方面の強い関心とご支援の大きさを今更のように痛感し、深くお礼申し上げます。

次第にオオバコなどの雑草におきかえられ、最後に完全な裸地となつてゆく状態が明らかとなった。また多くの学生を動員しての登山者数の測定から年間の大岳登山者が約一万七千名と推定された。すなわち、二万人以下の登山者で八甲田山は許容量を上まわったオーバーユースの状態になっているのだ。

ところで今度の計画を見ると、酸ヶ湯から大岳頂上を経て田代平にいたる延長七・二*のロープウェイを引き、四つの大きな駅をつくり、年間百万人をこえる観光客やスキーヤーを招くとするのである。二万人の登山者で病み果てている八甲田がそのとき、どのよう痛めつけられるか想像に難くない。しかもこのコースの四分の三は原則的には、道路や建築物を一切認めない国立公園の特別保護地域にわたっている。何という無謀な計画であろう。

この法的困難を見越し、「整備に對しての許認可が得られやすいように」事業は青森県を主体とし、地元資本の参加を求める第三セクター方式をとるとするが、その間に大手観光資本の影響が見え隠れしている。そもそも自然環境の保全に責任を負うべき県当局が、率先して大規模な自然破壊に手を貸すことは黙視し得ない。

さらに北八甲田山は明治時代二百余名の命を奪ったかの八甲田遭難でもよ

(自然保護随想)

自然は子孫から借りている

円高ドル安に象徴される急激な為替変動に對応し切れないで、一部の産業は人員合理化や多角経営を、また日本経済は貿易摩擦解消のために、輸出依存体質脱却と内需拡大を迫られている。国際競争力がなくなった製造部門の海外シフトによる産業の空洞化は、雇用不安をもたらし、この解消と内需拡大の期待を担って、昨年六月に総合保養地域整備法が公布された。リゾート地域法とも呼ばれ、過疎地などの地域振興も目的の一つと言う。

しかし自然保護の立場から見ると、この法律の問題点は、開発の対象となる地域が『良好なる自然条件を備えた相当規模の地域にスポーツ・レクリエーション施設などを整備する』点にある。すでに北は大雪山系から、南は沖縄まで、全国で百五十カ所のリゾート開発計画が申請を準備中といわれている。

昨年七月に国立公園に指定された『釧路湿原』の美しい景観が見渡せる岬を、大手の観光企業が買い占めているといわれているが、このほかにも国立公園の特別保護

く知られているように、とくに冬期間の悪天候はきびしいが、そこに地理不案内な多数のスキーヤーを送り込むことの危険性に対し、どのように対処しようとするのであろうか。

観光事業は豊かな自然を永續させ、これと賢明な共存をはかることによつて、はじめて安定した繁栄を望みう

地区を含めて、いくつもの景勝地がロープウェイ、リフトを設備し、大規模のリゾート地として開発を計画しているのも問題だ。

この開発計画には、観光サービス業ばかりでなく、苦境にある造船業や大手鉄鋼会社まで参入を狙って営業活動を強化している。雇用不安に怯える不況製造業の社員が地域開発に寄せる希望や心情を想うと、自然保護はどうあるべきか、ジレンマに落ち入る。

しかし計画中のリゾート開発の目指す理想の姿が、箱根や軽井沢、伊豆であるらしいというのでは困る。そして芸のないことにテニス、ゴルフ、豪華なホテル、ロープウェイ、リフトである。日本中の『良好な自然条件を備えた地域』が、同じような保養地になって喜ぶ人がいるとも思えない。

冒頭の『自然は子孫から借りている』は、山陰支部の小西毅氏から教わった言葉、FAO(国連食料農業機構)の『大地をわれわれは、われわれの子孫から借りている』から借用した。今月の会報に載っている自然保護標語の『次代に残そう美しい山と溪』も同じ意味だが、リゾート開発の関係者にお願ひがある。美しい日本の自然を、そのまま子孫に引き継いで貰いたい。(関塚貞亨)

る。近視眼的に目前の利を追うのあまり、貴重な自然を喰い物とするがごときことは厳に戒めねばならない。

いま青森県内には「美しい八甲田山を子供たちに」県民の会(会長秋

元良治青森中央短大教授)を中心に、この愚かな計画に對する反対の気運が高まっている。しかし経済構造改革による農林・酪農・漁業等の低迷とリゾート法などによる観光優先の風潮など

次代に残そう美しい山と溪

から見ると、この計画を撤回させるのにはかなりの困難が予想される。

万一この計画が認められるような事態となれば、他地域の国立公園の保全にも暗い影を投ずることになる。われわれは何としても、この無謀な計画を阻止しなければならぬ。

日本山岳会の自然保護委員会を始め、会員諸氏の応援を切にお願いする次第である。

(北海道自然保護協会会長・北大・東北大名誉教授)

＊ (自然保護委員会より)

八甲田山ロープウェイ建設問題については、昨年二月に美しい八甲田を子供たちに、県民の会理事長蒔苗政儀氏がルームに見えられ、関塚理事、池田、国見の三名がお話を聞きました。委員会としても自然破壊の問題個所としてマークしています。

昨年お話を聞いた段階では、現行の国立公園地域の地種区分別行為規制によれば、このような計画が実現するはずはないと考えておりましたが、ご指摘のようにリゾート法の施行などもある状況は変わって来たと判断しています。

委員会の本年度の事業として、問題地域に委員が分担して現地調査をし実情を把握したうえ、委員会で対応を決

めていく方法をとることにしており、八甲田もその個所に入っています。

なお、八木さんがご調査になった八甲田調査団中間報告も蒔苗氏より送っていただき拝見しております。

(国見利夫)

創立三十周年

記念集会

熊本支部

熊本支部の支部結成三十周年を祝う記念集会が、去る十一月十四、十五の両日、南阿蘇の高森町で開催された。

幸い天候にも恵まれ、今西会長はじめ、東京、京都、関西、山陰、および九州各地から五十一名が出席して盛大に行なわれた。

十四日は午後五時から、根子岳を間近に望む南阿蘇国民休暇村で記念晩餐会が開催された。

祝宴は元NHKアナウンサー河上会員の司会で進行。はじめに西沢支部長が歓迎のことばを述べ、今後ともご指導、ご支援をお願いしたいと挨拶したあと、今西会長が挨拶され、これから

も熊本支部の益々の発展を期待しますとの祝辞をいただいた。

次いで熊本出身でもある斎藤京都支部長が、熊本時代の思い出をまじえて

第二十五回

「この一本展」での展示図書について(II)

望月達夫

(昭和六十二年十一月の「山岳図書を語る夕べ」で望月氏がお話しになった本につき、改めて同氏に解説をお願いしたものです。 — 図書委員会)

＊

(7) Ch. Hudson & E.S. Kennedy: Where There's a Will, There's a Way, an Ascent of Mont Blanc, by a new route and without guides. 1856.

(目録番号⑩)

言うまでもなくアルプスの古典の一つであり、先述の本山山岳図書展覧会目録にも詳しい説明が付されている。『先蹤者』中にも勿論取りあつかわれ、同書対一六〇ページの挿画は本書から採用されている。一三〇年前刊行の本だけに、私が入手した当時から破損がややひどい。

(8) G. Merzbacher: The Central Tian-Shan Mountains. 1905.

(目録番号⑪)

早期の天山山脈、殊にハン・テン

グリ付近の探検では最も重要な文献の一つ。折込み地図は美しい印刷である。この本も今では珍らしい部類で、深田文庫目録にも載っていない。

(9) Robert Shaw: Visits to High Tartary, Yarkand, and Kashgar, 1871.

(目録番号⑫)

ショーはヤングハズバンドの伯父さんで、英国人で極めて早期に支那トルキスタンに入った一人である。この本の挿絵は写真版でなく、まだ淡彩の銅版画が用いられていて古雅な趣きがあり、またTurkistanの綴りも古い形のToorkistanとなっていたと思う。

(10) Himalayan Journal vol. 1. 1929.

(目録番号⑬)

ここに改めて説明する必要もないHJの創刊号。約十年前丸善で初版の十五冊(vol. 1~vol. 15)の復本を所持しなくても、内容を読むこと「こ



挨拶された後、八八年春の三国友好登山に参加する熊本支部の馬場会員が出席者に紹介され、北側隊長として参加する斎藤支部長と共に、会場から激励を受けた。続いて権藤福岡支部長の音頭で乾杯、和やかな宴会に移った。

立食式の宴席は、久しぶりに顔を合わせた会員の歓談で熱気に溢れ、焼酎のグラスを片手に、山の歌あり、民謡ありと、時間を忘れて盛り上がった。

予定していた時間も過ぎて、最後に熊本宮崎支部長の発声で万歳三唱して

お開きとなったが、その後も宿の一室を借りての二次会は夜が更けるまで続いた。

翌十五日は根子岳東峰(一四〇八m)への記念登山。南阿蘇国民休暇村から見た根子岳は、熊本名勝百景の第一位に選ばれており、朝日に染まる豪快な根子岳の雄姿に、早朝からシャッターの音が響く。宿舎前の広場で、熊本支部の本田会員による阿蘇の山についての案内のあと、八時半、車に分乗して出発。十五分ほどで登山口へ。晩秋とは思えない小春日和のなか、ラクダ色に染った急な尾根を登ること一時間半で頂上に到着。二等三角点の狭い頂上で、今西会長の音頭で乾杯。

好天に恵まれた頂上からの眺望は実に雄大で、視界をさえぎるものもなく、九重、祖母・傾、九州脊梁と、次々に九州の山々が見渡せ、遠来の会員に満足してもらったことができた。

二時、全員無事に登山口に下山したところで盛大な拍手のうちに解散。またの再会を約して、記念誌と記念品を手にとりそれぞれの帰途についた。

今回の記念集会にあたっては、三十名足らずの小世帯の支部ゆえ、なにかと行き届かぬこともあ

「展」ができるようになった。ただ最初の一本四冊(Vol. 1~Vol. 4)は、その後のものと表紙も内容の紙質も違っている。然し復刻版では同じように作られているので、その点をご覧いただきたいと思ひ、敢てここに取り出した。因にHJのコンプリート・セット(完全揃)は極めて少なく、わが国にも五部以上はなからうと思われる。深田文庫目録でも一冊の欠本がある。私の、初期のものは田辺主計氏から譲りうけ、戦中戦後の二冊はK・メイスンから贈与されたものである。

(11) Everest, A Guide to the Climb. (折りたたみ式)

(目録番号⑧)

ハント隊によるエヴェレスト初登頂後、間もなく出版されたエヴェレスト登山の簡単なガイドブック。当時ずいぶん早い出版もあるものだな、と思つて求めた記憶がある。

エヴェレスト登頂を述べた三〇ページの絵入り本としてW. Noyce & R. Taylor: Everest is climbed (A Puffin Picture Book). 1954. (目録番号⑨)というのがあるので、い

考までに付記しておく。

以上の他に二、三付言しておきたい。⑥ Cap. Alex. Gerard: Account of Koonawur in the Himalaya. 1841. は私のもつていたヒマラヤ文庫では一番古いものだったと思う(約一五〇年前の刊行)。⑩ H. Holdichの本はヒンズークシュ研究者には閑却できぬ文献。ワークマン夫妻のヒマラヤ・カラコルムの主著五冊⑪⑫⑬⑭⑮が完備し、さらにGJの抜刷り⑯があるが、これらは榎谷氏旧蔵本。⑰は深田文庫目録にも見られない。⑱⑲の「ジャーナル」十一冊はS S A F発行のものだが、発行年月が極めて不定期だったためか、十一冊しか刊行されていないにも拘わらず、完備しているのは珍しい。深田文庫にも欠本があった。現在集めるのは至難であろう。⑳のタイムズ特集号はハント隊のエヴェレスト初登頂直後のもので、これも現在では古本市場でもお目にかかれな

(終)

「この本展」

ったのではないかと恐縮しています。参加された皆様方には改めて厚く御礼申し上げます。

参加者 (東京) 今西寿雄、鳥居亮、岡沢祐吉。(京都) 斎藤惇生、高島法男。(関西) 入谷浩石、片岡浜子。(山

(陰) 井上豊重。(福岡) 権藤太郎、権藤ヒロ子、吉村健児、田代 実、高尾徳繁、高尾タカ。(東九州) 窪田祥三郎、加藤英彦、阿南寿範、清水 巖、内田正人、太田哲典、安井康夫、荒金通子。(宮崎) 魚本定良、宮下広次、児玉信子、富永チエ子、古市幸子、伊藤博夫。(熊本) 奥野正亥、西沢健一、馬場猛、馬場千代子、宮崎豊喜、佐藤光俊、石井久夫、本田誠也、多田隆峰、田上敏行、和仁古昇、大木野徳敏、菊池更生、門脇愛子、川端浩文、大木野マツ子、河上洋子、藤木孝一、鶴田佐知子、樋口 格、樋口洋子、馬場博行、前田辰男。(田上敏行)



会 員 通 信

(晩餐会の返信用はがきの中から会員の皆さんの近況等を紹介いたします。紙面の都合で割愛させていただきます。紙面の多数ありますがご了承ください。

――総務委員会

〔前月号からのつづき〕

喪中のため本年の山行日数大幅に減

この道、山と本とJACと…

孫 慶 錫

(韓国山岳会長)

お茶の水時代であったように思われる。山荘風のクラブルームに入ったら、一番先に眼に入ったのが、本棚にぎっしりつまった山の本であった。山の本集めに丁度一人悦に入っていた時であったが、早速「山岳」の創刊号からと終戦までの会報から、韓国における登山記録資料報告等を十日間かかって複写した。

私の山との出会いは中学校の時からだから、とうに四十年は過ぎている。山登りを始め、山の本を読み、ジャンコストにほれたり、メルクルにハッパをかけられたりしながら、勇しい気持にもなった。しかし、田部重治さんの「山と溪谷」を読んではすっかり哲学者気取りの山登りに陶酔したものだ。それから山の本にも凝って、今まで、ずい分集め、そのたびに喜んでる。あの当時JACの日高信六郎会長に頼み、三田、折井、交野、深田、そして田部重治さんを囲んで談笑した思い出は忘れられぬ回想となった。

山の本であるが、特に韓国の山に対する資料は非常に乏しい。根掘り葉掘り年代的に集めようものなら大変である。今までに間違っただけで伝えている登山史確立のためにも、資料と本は蒐集しなければいけないと、一人決心して努力したものである。神田の古本屋で思いがけなくめくった古雑誌や会報等で、ヒョッコリ韓国の山登り記録にありついた喜びは、幽林の中でみつけた美しい山景色の発見のようであった。

一つの山には絶頂があつて、登頂すれば下山しなければならぬ。しかし、本集めというのは頂点もなければ

完登もあり得ないのである。

一九七五年代から韓国隊のヒマラヤ進出記録も忙しくなり、八〇年代からは冬季だけで七、八隊、年間五〇隊以上の海外登山記録が続出する有様である。国内で、当年の全記録文献を集めるのも、大変なことである。また時折、国外での論評を期待して、山溪、岩と雪、岳人等を探しても、ヨーロッパ隊に比べて韓国隊の記録はどういうことか乏しい。残念である。何とか韓国国内で年鑑のような総合文献の発行をと、迫られていた。その折、計らずも山岳文献資料展示会を開催しようとの呼びかけがあつて、かけ巡ったあげく、約一万に近い、世界の山書がソウルで公開展示された。その中で、日本の山書は三分の二に近い数があり、六十代近い人々以外にも読まれていることが分った。またいずれは復刻されるべき朝鮮王朝時代の稀覯本もあつて、韓国登山史照明への意義ある企画であつた。これが機縁で山書会が創立され、二年前に会長になつてしまった。

引受けてしまった以上は何か結実させねばならない。古書店街をたんねんに歩き廻ったが、韓国についての山書、登山関係文献はあまり見当らなかった。今のJACのハチ割れそうな量の図書室をのぞいてみて、うらやましいと思うが、年期が違ふ。韓国山書会報にこのような雑文でも書く予定で、あれこれのぞいておいたら、早速この文から書くことになつてしまった。

いづれソウルに常設の山の書と資料等の展示館を開設しようと思う。その道は絶頂のない遠い道のりではないだろうか。

東京でこんな時よく相談にのって頂いた折井さんも、また深田さんも今は幽界におられる。また、思い出に残るその山荘もない。つきない思い出と山の本だけが残っている。そしてこの道は今なお遠い。

少して三十日前後か。海外遠征も結構だがもつと地についた活動も活発化出来ぬや。埼玉・柴田篤志(四九三二)

昨年以來「独眼竜政宗」に追い回さ

三國合同登山隊事務局だより

総隊長・隊長会議(カトマンズにて)

一月二十四日(二十七日)の四日間、三國友好登山隊の最終会議が、カトマンズにおいて開催された。中国側は史占春主席以下四名、日本側は、橋本龍太郎名誉総隊長、今西寿雄総隊長ほか、報道を含めて九名が参加した。

儀典の問題、北京総指揮部と現地登山隊長との関係等、リーダーシップに係る基本的事項の討議、さらにタクティクス・装備・食糧等の実務的問題の最終打合わせがなされた。今西会長、大塚副会長は実務会談に終始され、種々の問題について最終合意に到達することができた。橋本名誉総隊長は、各関係政府諸機関を精力的に訪問され、本登山隊へのネパール側の全面的協力体制もでき上った。ネパール山岳協会の友情に満ちた歓迎行事の数々、現地大使館をはじめJACCカトマンズ支部(?)の心こもる歓迎等によって会議は友好裡に幕を閉じることができた。

(湯浅道男)

第二回登山委員会

日時 二月六日午後六時
場所 ホテル・ニューオータニ

れ今回も欠席です。

宮城・伊達篤郎(五一五四)

今夏、初めて上高地の山研を使用し
* 会員になって良かったとつくづく感じ

た次第。東京・小沢武鷹(五六六五)

* 十月、家人親類等を連れて十五年振り
りで上高地へ行き、山研に初めて泊まり
り島田老に暖かくもてなされました。

出席者 桜内義雄、橋本龍太郎、小林与三次、高木盛久、漆戸靖治、加藤博久、川上末太郎、鎌田久、澤村幸藏、西堀栄三郎、今西寿雄、渡辺兵力、山田二郎、大塚博美、ほか実行委員会事務局員

議事 議長に今西委員長を選任し第一回登山委員会の決定にもとづく実行委員会経過報告が、大塚実行委員長によってなされた。特に隊員決定経過、予算の実施状況を中心に細かく報告された。若干の質疑がなされた後、委員全員が異議なくこれを了承。続いて、今後の実行、特に登山活動について、各顧問から、安全に登山が完了するように注意があり、さらに読売、日本テレビ側からは、報道体制についての説明がなされ、なごやかな内に委員会を終了した。

(橋本 清)

三國友好登山隊壮行会

日時 二月六日午後六時
場所 ホテル・ニューオータニ

(式次第)

開会の辞 前副会長 山田二郎
総隊長挨拶 今西寿雄
壮行の辞、登山隊総顧問 桜内義雄
" 登山隊後援総顧問 小林与三次
祝辞 中華人民共和国大使 章 曙

東京・橋村一豊(五八二一)

* 十一月五日、七十年振りに剣山に登
り墓参してきました。

北海道・一原有徳(六三一七)

* 土曜会で張り切っております。諸兄
のご出席を熱望。

東京・名児耶達男(六〇七五)

* 冬の走り込みを充分にして、トライ
アスロン歴三年目の来年を目指し頑張
っております。

静岡・久保田保雄(六二七〇)

* 京都での全国集会には今西会長、村
木副会長外幹部の方々が参加していた
だき盛大かつ楽しく行なわれました。
皆様方には尽力のほど誠に有難うござ
いました。七十六歳ですが京都集会で
は比良に登りました。

京都・太田徳風(六八四一)

* 十一月八日、六甲全山縦走(三回目)
を新記録にて達成。

兵庫・羽田英彦(七一一二)

* ひたすら自分の山行に専念いたして
おります。過日、望月達夫さんご紹介
介で昨年ご入会の橋本行雄さんと摺古
木山頂上にてお逢いしました。以来、

祝辞 ネパール国大使代理 モハン・K・シュレスタ

祝辞 登山委員会顧問 柳川寛治

乾杯 日本テレビ社長 高木盛久

登山計画の概要(説明) 実行委員長・大塚博美

隊員紹介 北側登山隊員、南側登山隊員、読売新聞社報

道登山隊員、日本テレビ報道登山隊員。

謝辞 登山隊名誉総隊長 橋本龍太郎

〃 日本山岳会名誉会員 西堀栄三郎

閉会の辞 日本山岳会副会長 村木潤次郎

以上のような式次第にて行なわれた。なお、この会には登山隊員ならびに報道隊員の全隊員の出席と関係協力社の方々、読売新聞社、日本テレビ、山岳会関係者の方々が出席された。出席者は三百二十人を数え、盛大に行なわれた。

壮行会では、中国、ネパール、日本の三国の友好と協力が強く求められ、かつ、無事に下山して登山が終了し、成功裡に完結することを誓い、なごやかなうちに閉会する。

第九回総合準備会

日時 二月七日午前十時。

場所 日本テレビ大会議室

今回の総合準備会をもって最終となるため、全隊員が出席し、午前十時に開会。最初に南側登山隊長の湯浅より経過報告が細くなされ、ひきつづき北側登山隊長の橋本より、読売新聞社、日本テレビ放送網との共催による三社間の契約等に関する注意事項ならびに日本、中国、ネパール、三国平等の原則による基本的な話し合いが行なわれた。

大塚実行委員長からは、先の登山委員会で全隊員が承認されたこと、出発まで残された時間は少ないが、宿題を残さず、必ずかたづけて出発するよう注意があった。

午後からは、医療関係の説明で、総括隊長の斉藤ドクターが行なった。特に登攀隊長の重広からは、出発に当たって、と題して日本を出てから帰るまでの細かい注意がなされた。今後の予定として

北側本隊は二月二十二日出発、南側先発は二月二十四日出発、南側本隊は三月九日出発、北側後発は三月十七日出発。

以上の予定にていよいよ登山隊は出発いたします。

三国友好合同登山会募金応募者(芳名)

(二月十五日現在、一口五千元)

(一一口) 若林啓之助。(一一口) 加藤治男。(六口)

飯野亨。(五口) 後藤幹次、加藤喜一郎。(四口) 松丸秀夫、蒲生明登、岡村治信、村木富士、杉山イタル。

(二口) 山果一雄、青木巖、石坂久忠、百瀬一茂、藤井信、中村純二、武田益太郎、長尾徳夫、土肥正毅、杉田博、高田真哉、小原和晴、加藤節子、石井忠雅、阿部慎二、松井哲雄、四手井靖彦、中川公夫、島田秀夫、峰尾勝美、有馬純、野呂邦彦、茂木義明、上野和之。(一一口)

阿部明義。(一口) 国分恒司郎、小野利次、安藤治、小貫伸一、沼田敏彦、野田憲一郎、水谷弘治、鳥海宣和、本橋淳次、秋山知也、大久保孟、佐藤芳久、角田啓蔵、井後幸太郎、木野光一郎、山根爾、柴山勝士、葦沢庸昭、佐々木幸雄、米村文比古、堀江真理子、石崎晴一郎。

〔累計一、六八六・一二口。六七二名。金額八、四三〇、六〇〇円〕

三国合同登山隊事務局だより

通信を交換し情報や山行の報告など楽しんでおります。

大阪・井関 扶(七四三二)

現在九〇Kg。七五Kgを越す頃より徐々に山行から遠ざかり、今はただ眺めているだけ。成人病と闘い体調を調整中。

宮城・政嘉秀一(七四九三)

現在地不明のまま雪中ビバークしたり沢の増水で流されかけた屋久島。二十年ぶりで宮之浦岳をめざしたものの、豪雨にたたられ、むしろサバサバした気分が帰ってきました。一周道路の改良だとかロープウェイを架ける話とか、自然をゼニ金にする風潮がますます強くなっています。わが国の未来は暗さが増すばかり、そんな気がしきりにします。

熊本・羽賀克己(七五〇〇)

年末に十二回目の台湾登山の予定です。兵庫・川崎泰男(七六〇〇)

今年には妙高山の初冠雪は平年より一週間遅い十月十三日でした。

新潟・白石丑太郎(七六四八)

今年には子供達と白山に登山することができました。会の山行にも参加できるよう頑張りたいと思っております。

東京・和田民子(七六六九)

* 会社の組織流動化で課替えがあり、気分切り換えがきかず山が遠くなりました。喘息発作にてこずっています。山を歩いて健康回復に努力したいのでよろしく願います。

大阪・西尾俊子(七九六五)

* 今夏、中国四川省の大姑娘峰に登ってきました。エーデルワイスの花が満開で一日中歩いても尽きない草原は魅力的でした。

東京・伊佐九三四郎(八〇九二)

* 白銀の富士山があかね色に輝く美しい冬山を眺めながら、奥高尾の山々や石老山に囲まれた田舎町で、土の文化(農業)に励んでおります。

神奈川・松岡 繁(八五五三)

* 残念ながら今年も欠席です。先日の京都の集会に参加させていただき楽しうございました。今から来年の支部の集いを楽しみにしております。

熊本・門脇愛子(八六〇五)

* 今年は念願のヒマラヤ登山に行ってみりました。正月は雪山を離れ台湾南大武山大麻里溪の遡溪を計画中です。

埼玉・関根幸次(八八三九)

図書紹介

大分の山

—大分県主要山岳丘陵一覽—

梅木 秀徳著

東九州支部梅木副支部長が、大分県内の主要な山岳、台地、丘陵、島嶼を八地区八十二地域に分け、総数一〇七八峰についての名称、高さ、測量点、地形、別の読み方、古名、地図名、緯度、経度などを丹念に調べ、コード番号付一覧表にしたもので、高度順、五十音順の索引もつけられている。

地形図には記載されていないが、名前がはつきりしているものや、山名の同定に疑問があり、要調査のもの、あるいは詩歌などに読まれた美称や異称などもそのまま採り上げられ、今後改訂の項目も出て来ると思われるが、各種文献を調べたり、現地で聞き取りを行なった苦心の跡も窺える力作である。

昨年十一月、私共は東九州支部会

* 病み上がりとしての試しとして、十月に九州本土最高の市房山に登って、やや自信を取り戻しました。

長崎・川里弘幸(八八九三)

員と共に、湧蓋山(ワイタザン)、万年山(ハネヤマ)、切株山、尺間山、背平山、梅牟礼山(トガムレヤマ)、沖黒島などに登って来たが、これらの大部分についても、異なる呼称や、別名のあることが判り、大変興味深かった。大分の山を知る上に欠かせない資料と思われる。

未だ古名も聞き出すことができず、大開発など行なわれてしまわない今の中に、他の地域においても、このような一覧の作られることを期待したい。

一九八七年十一月 第一版刊 B5版 一八〇ページ 編著発行梅木秀徳 〒870-11大分市光吉新町三ノ一 定価一〇〇〇円 (送料二五〇円)

(中村純二)

栃木の沢

栃木県山岳連盟

栃木県山岳連盟が、創立三十五周年の記念事業として「栃木の沢」を刊行した。加盟している四十四の山岳会が

* 日本百名山を十一月十二日伊豆の万三郎岳で完登。二百名山に挑戦します。

新潟・斉藤省吾(八九〇三)

手分けをして、三年間を費し、県内の河川の源流を調査した。鬼怒川、那珂川、渡良瀬川、大谷川がその主なものだが、調査した沢は凡そ百本に達する。県内の山岳については既に昭和五十七年に同岳連から一書が刊行されているので、今回の事業によって名実共に「栃木の山岳」の全貌が明らかとなった。各沢が美しい多数の写真、ルート図、コース・タイム、責任者名と共に概説されている。山岳会の記念事業としては以上の価値ある記念事業は他にあるまい。

一九八七年十二月刊、一七三ページ、頒価二〇〇〇円

問合先 栃木県山岳連盟 (〒321 宇都宮市今泉3-12-31 坂口三郎方。電話 0286-21-0916)

(河野幾雄)



図書紹介

十一月八日、いいでの里(宮古地区)にて、福島支部の事業として、第三回目夫婦同伴「まぼろしのそばを食う会」をやりましたところ、大変会員数が増えております。同時に飯豊山を見

る会も開いております。

福島・五十嵐昭市(九〇二六)

最近南アルプス南部を歩いております。原生林の山々も年々林道のナグリ込みにあつて傷つけられています。朝日岳沢口山、大札山、蕎麦粒。次は西黒法師の予定。

静岡・永野敏夫(九四九四)

宮崎支部会員では県内百山登山を目指して頑張っています。十一月三日には岳友の支援を得て、「第三回ウエストン祭」を開催し、故人の遺徳を偲び、新たな愛着を持ち、青少年に山の魅力を語っています。

宮崎・井野元繁(九六七四)

月一〇二回、近畿のヤブ山または奥美濃の山に興味をもつて行っています。大阪・熊田忠明(九七〇八)

大正二年、大木操氏撮影のウエストンのガラス乾板の、高配、心から御礼申し上げます。その後、ウエストンの大正二年の登山日記を発見しました。「山溪」の一月か二月号に概要掲載の予定。長野・三井嘉雄(九七一六)

過日全国集会(京都)に参加、桑原氏の「なぜ京都か」の話を楽しく聞き

ました。翌日の比良登山も天気こそ霧模様でしたが、会長はじめ皆さんと懇親で参加の甲斐がありました。

神奈川・石田喜八(九八九二)

鹿児島県隼人→高千穂→霧島縦走→生駒高原→須木→旧田代八重小跡→檜の口→市房山→大河内→椎葉→鞍岡→蘇陽→高千穂と九州中央山地の山、峠を十日間歩き通しました。

大分・三浦玲子(九九四〇)

今年も数多くの登山を楽しみ、「宮崎百山」の目標に向かって頑張っています。宮崎・服部敬二(九九七三)

七歳位から兄と一緒に山を歩きましたので、今七十一歳になりましたが山が好きで、山から離れた生活は出来ません。

神奈川・野々口文子(一〇〇五一)

西日本スポーツ新聞紙上に、今年四月より、毎週一回「物語ハイキング」を連載、北部九州の山と歴史、伝説を紹介しています。

福岡・井上 優(一〇一二五)

「三國友好合同登山の成功を祈る」の趣旨で十通。

「病氣療養中のため欠席」「健康を害

し出席出来ず残念」等の趣旨で

神奈川・榎有恒(三四一)、神奈川

・増本茂(一四〇五)、神奈川・田中

栄蔵(二二五三)、東京・橋爪幸達(二

二六四)、東京・渡辺嘉男(二四七六)、

新潟・佐藤金一(二五〇五)、長野・

高山忠四朗(二七〇二)、福島・川又

恒一(二七二二)、兵庫・井上義郎(四

三八三)、東京・茶谷東海(五一五二)、

神奈川・三上正治(五五四二)、神奈

川・小林重一(七三九七)、東京・大

木淑子(八二六九)、千葉・河原正徳

(八六九一)、東京・高橋晋作(八九

〇八)、埼玉・黒沢和士雄(九七七八)、

京都・佐藤武雄(一〇〇七五)他。

(文責・総務委員会)

報告

現地小集会

―秋の鉢盛山―

集會委員会

塩尻から西、松本から南西に見える鉢盛山は、名のごとく鉢に飯を盛ったように見えるおだやかで静かな山である。

「鉢盛は朝餉まつ山鉢伏は夕めし終えて月をまつ山」と塩尻に生まれた歌人、太田水穂はその山容を見てこう詠っている。

昨秋、九月二十五日、塩尻駅に集合

◎高郷山荘へ

どうぞ

会津の山で一等三角点「飯豊山」を始め十五峰、そのなかに「鳥屋山」も含まれております。

「鳥屋山」の山開きは四月二十四日です。

日本山岳会高郷山荘に泊って登山はできませんが、残雪を踏み、カタクリの花を観ながら山開きに参加しませんか。

▽山荘一泊(素泊り・寝袋持参) 九〇〇円

▽水道・ガス・電気・風呂場完備

▽山荘電話

〇二四一―四四―二三六六

国道四十九号郡山より車で約二時間

JR磐越西線 荻野駅下車し駅前

より歩きで十五分

(連絡先)

〒969-43 耶麻郡高郷村・高郷村

役場企画課 0241-4-2111

〒969-43 耶麻郡高郷村・荻野駅

前 伊藤尊仁 0241-4-2124

した総勢二十五名、それぞれの車に乗り合せて、登山口である朝日村に向う。ほのかに香のする桔梗ヶ原のブドウ畑を横切り、前に鉢盛山を望みなが

ら、木曾義仲が馬を洗ったという洗馬に入ると、折しも村は秋祭りの最中であつた。

鉢盛権現にお供えする御造酒の用意もそこそこに、秋の取り入れを右や左に見て、朝日村最奥の御馬越(オンマゴ)から野俣沢沿いにつけられた林道に入る。

出作りの山の畑を過ぎると林道は曲りながら上へ奥へと伸びて行く。傍らのススキもしつかりと穂をつけ、山の秋が駆け足でくるところを知らせている。

アカマツやカラマツの林が、ミズナラやキハダ、ミズキなど夏緑の広葉樹に変わり、ナナカマドやダケカンバを混えた笹原のなかを折れながら進むと、松本平はもう目の下である。

岳沢の橋を渡ると登山道である林界の尾根は目の前だ。岳沢入尾根である。

登山道の入口で挨拶と身仕度をすませ、地元のプロ会員より頂いたジョナホールというリングを各自ザックにしたのばせて、早速登りにかかる。

コメツガにシラビンという亜高山帯特有の森の中を、下生えの植物を楽しみながらゆつくりと登る。カモシカ棚、カモシカなぎと大滝沢の源流を左に見ながら、なおも登ると明かるく開けたくさ原に出る。

ハト胸を右に見て、夏の名残りのく

追悼

山崎金次郎さんの急逝を悼む

去る十一月三日、山崎さんが二日に急逝された知らせを受けました。茫然自失。享年九十。「霧の旅会」の創立者の一人で、会は日本山岳会より古いと聞いております。山岳会の行事にも数多く参加されておられ、私も何回もお供させて戴いたが、お年とも思えぬお元気でした。慈父のような温顔で二十も若い私は随分可愛がって戴きました。「土曜会」にも欠席されることはほとんどなかったですが、九月十九日が最後となつてしまいました。

最近九月一日より七日まで乗鞍に行かれ土曜会へもお元気で出席され、その節のお話などされておられました。もうあのお声も聞かれないと思うと心淋しい思いです。冬の高湯へお供したことで、紅葉会や山行で、会の皆さんと一緒したことなど、走馬灯のように思い出はつきませんが、土曜会に出られたあのお姿が見られなくなつたのが、出席の人達にとっても一番淋しいことでしょう。

お若い頃は、ハーレー(米国製オートバイ)に乗って街を馳せられたというから、大正末から昭和初期のモダンボーイであつたのでしよう。お勤めは日本光学で、その関係で外地へも行かれたとか。お人柄が出来たのもそのためでしょうか。土曜会で物静かに話される口調は、私達が恥かしいほどでした。

昨年、若い人の心遣いで米寿のお祝いに「うかい鳥山」に行かれた時は、私は入院を控えてお供させて戴けなかったが、大変に楽しい山行であつたそうで非常に喜んでおられた。

山崎さんに急逝されたことは、ご遺族にとつてさぞお心残りであつたと拝察されますが、天寿を全うされて大往生されたのであつて、心よりご冥福をお祈りするのみです。

告別式ではおだやかな遺影が参会者を見ておられたが、今後は天国の一角から私どもを見つめていて下さることでしょう。

昭和六十二年十二月

名児耶達男

さ原を横切ると、村界尾根の小さなコルで、早やコバノミツバツツジやナナカマドなどが色づき始めていた。

ガザクラなどが見られ、シラタマノキが名の通り小さな真珠ほどの白い実をつけている。

いが、雲一つない快晴に恵まれて、そのながめはすばらしい。

村界尾根を左に折れ、シラビンの林の中をオサバグサ、ゴカヨウオーレン、マイズルソウ、イワカガミ、カニコウモリなど林床を色どる植物を楽しみながら、鉢盛坂をひと登りすると権現の庭である。地元では神のタンボと呼ばれているが、ワタスゲ、アオノツ

シラビンやトウヒの濃い緑の中に、ダケカンバの黄色が鮮やかに映えて美しい。

大滝、鍋冠山の前山から、槍、穂高を始めとする北アルプスの山々、恵那山から駒ヶ岳の中央アルプス、仙丈、甲斐駒の南アルプス、諏訪の湖と八ヶ岳の峯々、高ボッチ、鉢伏山、美ヶ原のなだらかな山々、遠く黒姫、戸隠の山々までが一望に見わたせる。

村営の避難小屋、鉢盛山荘の前で一休みし、小屋裏手の坂を頂上目指してゆつくり登る。鉢盛権限の小さな祠がひっそりと建つ頂上は思ったよりせま

手伸ばせば届きそうな乗鞍を前

に、思い思いの場所で四囲の山々を充分に堪能する。

穂高の山々をちよつと違う角度からながめながら昼食にする。自己紹介、近況と、またかつぎあげた御造酒もあり、出発時間を延長しての山頂の楽しい一刻であった。

全員打ち揃つての記念撮影も終え、名残りも惜しく頂上を後にする。

下り道は山談議、薬湯談議に花を咲かせつつ、登山道入口に全員無事に下山する。

秋の陽はまだ高く、互いに語り足らずということ、お別れ会を行なうことになり、全員で麓の会場まで地元の日置会員の先導で移動する。

針尾の舟ヶ沢という野趣豊かな会場

清田 清氏

(会員番号五五四五番)

前日大山岳部長(元日大生産工学部教授、東大山の会会員)。十二月二十日十一時三十分、肺炎のため逝去されました。享年八十三。謹んで哀悼の意を表します。

氏は、昭和一桁時代、旧制六高山岳部員として、穂高連峰の積雪期の開拓時代に活躍され、昭和八年一月二日、槍ヶ岳から北鎌尾根の独標ま

で、山女魚の塩焼きに舌つづみを打ちつつ、今日の山行を思いおこし、ビールや地酒で乾盃。

山行の計画や思い出、山の湯の思い出など山で結ばれた仲間の語らいはつきず、山女魚のおかわりも二度、三度と続き、時の過ぎるのを忘れる楽しい会であった。

好天に恵まれた今日の山行に感謝しつつ、それぞれ次回の山行と再会を約して、神山会員の散会の挨拶とともに、ほんのりともみじに染まった夕暮れの鉢盛山に別れをつげた。

参加者 三ツ石清、白木正俊、保科文人、日置邦、滝絃之、岡沢祐吉、菅野弘章、里見清子、丸茂キクエ、新井陽一郎、福島幸太郎、入澤郁夫、林利之、

での冬季初縦走に成功されている。

戦後昭和四十年より十五年間に亘り、日大山岳部長を務められ、この間、昭和四十五年には、日大シタ・ツツラ峰登山隊の隊長として参加。

さらに昭和五十三年には、日大北極点遠征隊の総隊長として陣頭指揮に当り、成功に導かれた。

著書としては、昭和六十一年三月、『穂高・ヒマラヤ・北極』を自費出版されている。

(松田雄一)

川名、山本、古高、祖父川精治、湯本一彦、高橋寿美江、斉藤敏男、大塚玲子、石井恵美子、林桂子、藤田礼子、神山良雄。

(白木正俊)

岩手支部通信

☆雪見会、一月二十九日、盛岡市のブルームで寒さを酒と旧交で温め大盛會。参加者十八名。

阿部国雄、石村実、石村日満子、関口宏、宮延穂、佐藤正、大関和夫、立花幹雄、松田和弘、棚田房男、二上純一、川島弘也、畠山優、高橋良晴、菊地修身、近藤有慶、小野寺正英、佐藤敏彦。

六十三年度行事は次の通り

☆春の例会 四月十六日(土)有志のみ空雲山へ。夕六時、岩手支部編「かぬか平の山々」(現代旅行研究所発行)の出版記念の夕。

所・玉山村好摩駅前、高田屋旅館、一泊三食付、五七〇〇円十酒代他。

山行・四月十七日(日)姫神岳世話人・石村実、〇一九六一八三一

一九四四

☆秋の例会 九月二十四日(土)有志のみ笠通山へ。夕六時集合、

所・遠野市、海老藤旅館、一泊三食、六〇〇〇円

山行・九月二十五日(日)片羽山世話人・田鎖寿、〇一九六一六一六七八三

☆第九回ヒンズークシユ・カラコルム研究会 支部・水沢山岳会共催。

時・十一月十九日、二十日

所・水沢市、会場未定

参加費、一万円、

世話人・菊地修身、〇一九七一二五一四七四三

会務報告

一月理事会

1月13日 午後6時30分
場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚、村木副会長、鳴原、太田、織田沢、大橋、鈴木、関塚、橋本、松永、早坂、浜口、小林、新井、大森、岡沢、勝山各理事、太田幹事、平林、山野井評議員

委任 田部井理事

審議事項 * 大阪市立大学日中友好学術登山隊

報告事項 (一九八九)の後援依頼の件 承認

* 三国登山 南側ドクター交替 山下俊一、忽滑谷和孝、北側隊員交替 神崎忠男、小池英雄、北側隊員 高

橋省吾

* 横浜ウエストン祭は近く
実行委員会をつくる。

* 海外Ⅱ一月二十七日に南
極徒歩行のR・スワン氏
の講演会を予定

* 財務Ⅱ三国登山の募金状
況は、十二月三十一日現
在の会員募金——五九五
名、一五二三口、七、六
一六、一〇〇円、企業六
社、三、〇四〇、〇〇〇
円

* 集会Ⅱ一月十五～十七日
にスキー懇親会、二月七
日、奥久慈・男体山

* 図書Ⅱ三月十九日、山岳
史懇談会、堀田弥一氏

* 科学Ⅱ一月二十一日 談
話会

* 医療Ⅱ二月二十六日 講
演会「登山と水分補給」
鈴木政登氏

* 高所Ⅱ十二月十九日のシ
ンポジウムの報告を会報
に掲載する。

* 婦懇Ⅱ忘年会の参加者は
七十四名。一月二十六日
に新年会

* 総務Ⅱ三月十二日 新入
会員オリエンテーション

報告事項

* 理事会に先立って開かれた評議員会
では、昨年の七月二十五日の会長諮問
に関する評議員会の答申がほぼまとま
ったとの報告が山野井評議員によって
行なわれた。

評議員会

日時 十一月九日(月) 午後六時半

場所 本会ルーム

出席者 今西会長、大塚、村木副会長、
松田、山田、大島、広羽、大森、安間、
中世古、宗實、佐々木、近藤、越智、
山野井、田中各評議員、鳴原常務理事、
児玉書記、以上十八名出席

議事

(1) 本年度名誉会員推薦の件

本年度は推薦者なしと決定した。

(2) 会長諮問事項に関する検討

本件に関しては、答申案としての最
終的な結論を得られず、引続き在京評
議員会で審議することにする。 以上



(1月)

11日 総務委員会

13日 在京評議員会、理事会

18日 図書委員会

19日 自然保護委員会

●奥多摩・浅間嶺(九〇四) 新入会員歓迎・新旧会員交流 さくらハイク

◎談話会
三月二十五日(金) 六時半、ルーム
登山の行動科学 千葉 重美
同シミュレーション 小山内正夫
四月十五日(金) 六時半、ルーム
山の航空写真あれこれ 大森弘一郎
科学研究委員会



☎ 234-6659

この電話で
お知らせ
しています

20日 三水会
21日 科学委講演会、学生部指導委員
会
22日 図書委員会
25日 資料委員会
26日 婦懇新年会
27日 海外委講演会 R・スワン氏
29日 自然保護事務局会議
1月来室者321名

.....
会員異動 1月
退会
田中善一(四九一四)
増木康郎(三二一六)
押谷裕子(九二七〇)
物故
岩永安雄(四八七〇) 12月25日
奥井忠保(五九六二) 10月31日

歩行時間は四時間程度
日時 四月十七日(日)
武蔵五日市駅前十時集合
申し込み・問い合わせは事務局へ。資
料を送付します。(雨天中止)
総務委員会・集委員会
*
◎シンポジウム
『危険な動物と安全登山』
登山活動をおびやかす動物がいま
す。毒蛇やヒル、ダニなどはその例で
すが、ツツガムシやマラリア、寄生虫
なども地域によってはかなり危険な存
在です。
これらの動物の解説と対応の仕方につ
いてシンポジウムを行いますので
多数ご参加下さい。
日時 四月十六日(土)
午後一時三十分～五時

大味精司(七二七一) 6月
帰国
前田精三(五四六三)
終身会員へ
寺本 晃(四六〇三)
氏名変更
荒井弘美↓山中弘美(九九六二)
場所 本会ルーム
参加費 五百円(予稿集費)
メインテーマ 危険な動物と安全登山
講師と演題
●ツツガムシ 千葉県衛生研究所長 太田原美作雄氏
●ダニ 国立科学博物館動物研究部 浅沼 靖氏
●寄生虫 国立予防衛生研究所 影井 昇氏
●ヘビ 前、国立予防衛生研究所 近藤 了氏
●昆虫とヒル 元、三井金属鉱業(株) 取締役 塩原 幹治氏
●クマ 本会会員 中村 純二氏
●マラリア及び治療全般 本会会員 浜口 欣一氏
科学研究委員会

あとがき すでにこの会報でも書き、
理事会でも承認されましたが、先月号
より使用活字を8ポイントから9ポイ
ントと大きくし、ページ数も増ページ
となりました。また毎月二十日発行も
極力守るよう努めるつもりです。
▼このため、寄稿される原稿も、分か
り易い(達筆でなくともよい)字で、
誤った活字が使われないよう、誰にで
も読めるようにはつきりと書き、一行
十七字か二十字にして(ワープロの場
合は行間を広くとって)原稿用紙を使
って送り下さい。
▼指定する月の会報に記事を載せても
らう(お知らせ原稿など)ためには、
その月の前月十日までに当委員会へ原
稿を入れて下さい。日時、場所、講師
名など不詳部分があるときは、その部
分を空字とし、分かり次第連絡して下
さい。(会報編集委員会)
昭和六十三年三月二十日発行
102 東京都千代田区四番町五一四
サンビニウハイツ四番町
発行所 社団法人 日本山岳会
編集代表 岡 沢 祐吉
電話 東京(261) 四四三三
振替口座 東京三二四八二九番
東京都港赤区坂一三二六
赤坂グレースビル
印刷所 株式会社 技報堂